

二〇一九年一〇月二日

靱を摺る納屋を飛び交ふ村雀
句会果て床に転がる式部の実

愛正

二〇一九年一〇月一日

ぎんなんの落つるにまかせ宮暮るる
爽やかにソプラノ洩るる校舎から

小袖

活ける間もほろほろこぼれ実むらさき

満天

楼門の漆黒の鋺秋の冷え

菜々
たか子

二〇一九年一〇月九日

半世紀祖母の命日菊日和

こすもす

ジーパンに盗人萩を持ち帰る

せいじ

遠来の吾子を迎ふる月の駅

せいじ

秋の声八百年てふ古木より

ほんこ

神木へ移す車道の枯たうらう

やよい

堂縁を借りて一服秋日和

たか子

二〇一九年一〇月八日

佇めば楽たのしめと秋の川

明日香

国分かつ山より流れ紅葉川

菜々

落柿舎の添水静寂を一擲す

宏虎

柿熟れて無住の庭を点しけり

やよい

二〇一九年一〇月七日

里山の日差しに藁塚の膨らみぬ
道連れのご当地訛り花野風

うつぎ

三代に亘る播り鉢とろろ汁

うつぎ

稲架日和バスに揺られて里山路

菜々

二〇一九年一〇月六日

玉砂利を鳴らし参拝菊日和

智恵子

カリヨンの響けば釣瓶落しの日

せいじ

二〇一九年一〇月五日

田終ひの煙たなびく里山路

宏虎

先生の胸へとゴール運動会

なつき

祠へと誘ふ畦の彼岸花

明日香

柿太る生家に兄の独り住む

はく子

毎日句会みゆる選・二〇一九年一〇月一三日